

## 臨時貝塚市史編纂部編

### 貝塚市史

本市史の計画は既に昭和一五、六年頃から始まり今日に至るまで広く史料採訪を行つてきたと聞く。広島大学の福尾猛市郎教授を中心に、岸本留雄・藤本篤の両氏、更には貝塚市役所、市民の協力のもとに完成した三巻にわたる大部な市史である。ここではとくに最近発行された第三巻の史料篇に限つて主として紹介したい。

この巻の構成は三部にわかれ、第一部編年史料、第二部諸記録と最後に横書きの貝塚市史年表となつている。

第一部は「大日本史料」のように逐年原史料を採録し、時期は日本書紀崇峻天皇期から明治二二年にわたつている。とりわけ史料的に恵まれているのは、中世及び近世である。中世では高野山領の泉州日根郡近木庄関係の史料が多く収められてこの庄園の個別研究を助けることになると思われる。近世は質量ともに最も豊富で、ざつとみた範囲だけでも四〇軒近くの文書所蔵者の名がうかがえ、蒐集の緻密さを十分に示している。中でも貝塚願

泉寺ト半家と畠中の要家の二家は、近世初頭の稀有な史料を初め最も数多く、泉州地方の研究に裨益するところまことに大である。内容も寺内町としての貝塚の特異性、岸和田藩政(貢租・産業)等々広範囲にわたつている。

第二部は、長文の史料を取めている。文禄三年の近木庄窪田村検地帳を初め、殆ど史料は煩をいとわず全文をのせるという態度をとつている。とくに寛永二一年の畠中村算用帳などは、近来当地方の近世初頭の算用帳の分析が行われていることからみて、すぐさま利用しうるものと思われる。また和泉一國高付名所誌(年代不明)や万記録(卜半了観記、延享三)はそれぞれ泉州全般及び貝塚の明細を示したもので、当地方岸和田藩作成の村明細帳が未発見の現在、広く活用されることと思う。最後の市史年表(八〇頁)は第一巻から第三巻までの叙述を整理したもので、まことに便宜を得たものといえよう。

全体として感じたことを二、三あげてみると、第一、二部は活字6号二段でぎつしりと総頁六八頁に及んでいる。このため載録史料の範囲が広まり、種々の分野にわたるとともに貝塚市以外の地方の關係史料ものせうる

という利点をもつている。読みごたえのあるものであり、とくに第一部は原史料に対してゴチで解説を付している点も行届いたものである。

史料蒐集も二〇年に及んで、ここに載録されたものには、すでに散佚を伝えられるものや深く蔵されていて容易に閲覧調査の機を得ないものなどがあつて、近時盛況を伝えられる泉州地方の研究に利するところ大である。また第三巻をとくに安価で広く頒売されたことはとくに利用者の感謝するところである。

以上蕪雑な紹介によつて本書の価値を損ずることをおそれるが、長年月にわたつた調査の労に心から感謝して筆をおきたい。(第一巻A5版本文七七八七頁 昭和三〇年三月発行 第二巻A5版八六四頁 昭和三二年三月発行 第三巻(史料)本文六六九頁年表八〇頁 昭和三三年三月 大阪府貝塚市役所発行)

(酒井 一)

高田市史編纂委員会編

高田市史

越後の高田について、われわれはいくつかの共通の知識をもつている。旧城下町として

現在もなおその面影をよく遺していること、網吉將軍の時代に越後騒動と呼ばれる御家騒動が起つたこと、また享保の質地騒動、明治十六年の高田事件、昭和初年の和田村小作争議、あるいはこの地帯が有数の豪雪地域で、雁木と呼ばれる遊雪用のアーケード(?)が町並を特徴づけており、スキー発祥の地としても有名であること等々。このたび発刊された「高田市史」全二巻は、これらの事物に関するより詳しい知識を与えてくれる。

高田の歴史は慶長年中に松平光長がこの地に城を築き町を創設して以来のことであるから、高田市史もそこから筆が起されている。第一巻は開府から明治四十四年の市制施行前まで、第二巻は市制施行から昭和三十年の近村合併までを取扱い、章は時代別に、節は項目別をも加味して構成されている。表現はやさしく、写真・地図・グラフも比較的多く挿入され、またたとえば、はじめてポンプを買った人、死体解剖の最初といった細々とした事柄や名士紹介などが適宜に記載されていることに、その地に住む一般の人々に愛され重宝されるための好ましい配慮がうかがわれるのである。さらに、各巻のはじめに年表、お

わりに索引のかなり詳しいものが付けられ、各頁に頭註があつて、郷土誌の機能の一つであるその地の事物に関する辞書としての役割にもかなつたものとなつてゐる。

しかしながら、それはまた専門的研究にとつても有用であつてほしいことはいうまでもなく、その点でこの書は原史料もできるだけ載せようとしており、載せない場合は叙述の抱つてゐる史料名を記している。原史料の掲載に関しては、すでに学界に紹介されてゐるものや重要なものより、比較的知られてゐない史料を掲げる努力を払つてゐるように見受けられる。また概説された部分にあつては、高田城址の測量、土族授産、米騒動、和田村小作争議等の項にみられるように、郷土史研究雑誌「頸城文化」などによつて得られた成果をとり入れ、編集委員の蘊蓄を傾けている。

高田は典型的な城下町として発展した関係から、いきおいその歴史の叙述は藩史あるいは藩制史に詳しいという傾向を強く持つてゐる。そのためか、一般町民の生活の息吹きを描き出すに欠けた感があるが、それは高田市史に限つたことではなからう。むしろ、それによつて本書は高田藩政あるいは藩領の研究

にとつても必要なものとなつてゐる。(第一巻A5版八五六頁 第二巻七六〇頁 昭和三年五月 高田市役所発行) (高沢裕一)

### 大和高田市史編集委員会編 大和高田市史

近年奈良県下における市町村史の編纂は誠に目ざましいものがあり、すでに郡山・今井・天理など十数ヶ市町村に及んでゐるが、更に昨年大和高田市史が上梓された。高田は大和盆地の西南部に位置し、その歴史の淵源の深いことは云う迄もないが、現在また紡績業を中心に県下屈指の商工都市として繁栄してゐる。市史は「高田郷土史話」等の著者堀江彦三郎氏編集の下に、高田に由縁の深い同好の士が寄集い、郷土の歴史を回顧し、今後の発展の資助とされんとしたものである。叙述は平明、かつ郷土に対する愛着と、それでいて学的水準を保たれてゐるのは、本書へ傾注した関係者の努力の並々ならぬことを示して、快いが、更に豊富な写真に、委員野沢寛氏の滋味溢るる挿絵多数を加えたことは、一層